

## Ⅱ．研修別報告

### 8．岐阜県における End-of-Life Care 充実 に向けた研修会

# 岐阜県における End-of-Life Care 充実に向けた研修会

キーワード： End-of-Life Care 人材育成 フォローアップ研修 がん看護専門看護師

## I. はじめに

がん及び慢性疾患患者の増大や高齢化社会の到来に伴い、End-of-Life Care (以下 EOL Care と略す) の充実が求められており、EOL Care に携わる看護職者の教育の強化が喫緊の課題となっている。このような社会状況を背景に、「すべての人々へ質の高い EOL Care を届ける」をミッションに掲げた ELNEC-J (The End-of-Life Nursing Education Consortium Japan) の活動が推進されてきている。わが国では、日本緩和医療学会が中心となってこの活動を推進している。ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムは 10 のモジュールで構成され、2 日間で実施する内容となっている。岐阜県においても、岐阜県がん看護専門看護師コンサルタント事業として平成 26 年 8 月～平成 28 年 2 月に 6 回の研修会が実施されるなど、EOL Care に関する教育の裾野は広がりつつある。

一方、2016 年に筆者らが ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象として実施した調査結果から、看護職は EOL Care を実践する上で様々な困難や課題を抱えており、日々の実践の振り返りやプログラムの学びを基盤に EOL Care に必要な知識・技術を強化する機会を望んでいることが明らかになった。この結果より、平成 29 年に県内のがん看護専門看護師と協働し、ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修を開催し、参加者より好評を得るとともに、同研修の継続の必要性を確認した。

そこで、平成 30 年度は昨年度の共同研究で検討したフォローアッププログラムを基に看護実践研究指導事業として研修会を実施し、岐阜県における EOL Care の充実を図る。

## II. 事業担当者

成熟期看護学領域：奥村美奈子、布施恵子、宇佐美利佳、鳴海叔子、橋本薫衣

## III. ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修会準備

### 1. 研修内容の検討

#### 1) フォローアップ研修会講師

荻谷三月 (岐阜大学医学部附属病院)  
澤井美穂、住田俊彦 (東海中央病院)  
田上知江美 (岐北厚生病院)  
林ひとみ (大垣市民病院)  
土屋あすか (岐阜県立多治見病院)  
葛谷命 (岐阜市民病院)

#### 2) 研修会内容の検討方法

研修会の詳細について、平成 30 年 11 月 5 日 (月) 14 時～16 時に講師と教員で検討を行った。

研修会は前半・後半の 2 部構成とし、前半は「ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム」のモジュール全体の振り返りとモジュールについての講義、後半は前半の講義を踏まえたグループワークとした。

また、グループワークが効果的に実施できることを考慮し、募集人員は 50 名とした。

研修会の準備については、教員と講師は別に行い、必要時メール等で確認することとした。

### 2. 参加者の募集

募集者数は 50 名で、応募要件として「ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム」受講修了者 (受講時期や施設、実施主体は問わない) とした。

研修会参加者の募集については、対象施設を県内の病院 (101 施設)、訪問看護ステーション (78 事業所)、特別養護老人ホーム (159 施設)、介護老人保健施設 (78 施設) に対して、平成 30 年 12 月上旬に看護管理者又は施設長宛に案内状と研修会のチラシを送付し、同時に大学ホームページに研修会開催の案内を掲載した。

#### IV. ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修会開催

##### 1. 研修会開催日時・場所

日時：平成 31 年 2 月 2 日（土）13：00～16：00

場所：岐阜県立看護大学 講義室 203

##### 2. プログラム

13：00～13：20

開会あいさつ

講義 ①「ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム」の全体のモジュールの振り返り

13：20～13：50

グループワーク①

テーマ「End-of-Life Care を行う上での困りごと、それぞれが抱えている思いや感じていることの共有」

13：50～14：20

講義② 高齢者の End-of-Life Care

14：20～14：50

講義③ チームケアにおける看護師の役割

14：50～15：00

休憩

15：00～15：40

グループワーク②

テーマ「高齢者の End-of-Life Care とチームケアにおける看護の役割に関する実践上の課題と課題解決に向けた取り組みについて」

15：40～16：00

全体会：グループワークの結果の共有

閉会のあいさつ

アンケートの記入

##### 3. 研修会実施結果

###### 1) 応募及び参加者の状況

研修会への応募者数は 27 名であったが、当日 2 名が欠席したため、参加数は合計 25 名であった。また、参加者の所属は医療機関 9 施設、訪問看護ステーション 4 事業所、介護老人保健施設 2 施設、特別養護老人ホーム 3 施設であった。研修会終了後、参加者 25 名に修了証を交付した。

###### 2) グループ分けについて

参加者 25 名について、1 グループ 4～5 名のグループに分けた。グループワークで医療機関、訪問看護ステーション、高齢者ケア施設の状況が共有できるよう、グループメンバーの所属が偏らないように調整した。研修会は、講師である大垣市民病院の林ひとみ看護師が司会を務め、グループ毎に 1 名の講師がファシリテーターを担当した。

###### 3) プログラムの実際

###### (1) 前半のプログラム

まず、講義①を東海中央病院の澤井美穂看護師が担当し、約 20 分間で ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムの全体のモジュールの振り返りを行った。その後、グループワーク①「End-of-Life Care を行う上での困りごと、それぞれが抱えている思いや感じていることの共有」をテーマに、グループワークを行った。グループワーク後、3 グループがワークの結果を報告し、EOL Care に関心の低いスタッフをどう巻き込むか、介護老人保健施設での看取りのケアについての課題などとともに、ELNEC の学びをスタッフに伝えていきたいといった意見など、活発な意見交換がなされた。代表して報告した 3 グループの発言内容を表 1 に示した。

次に、講義②として岐阜県立多治見病院の土屋あすか看護師と岐阜市民病院の葛谷命看護師の担当による「高齢化社会における看護の役割」（モジュール 9 の振り返り）、次に講義③として岐阜大学医学部附属病院の荻谷三月看護師、東海中央病院の住田俊彦看護師の担当による「チームにおける看護の役割」（モジュール 1.6.10 の振り返り）

前半の最後は、後半の事例検討を行うための素材提供がなされた。内容は、70 歳代男性で膵臓がんステージⅣ（脳転移・骨髄転移）であり、全介助で傾眠傾向の状態ながら、以前からの本人の希望によって在宅療養へ移行する予定の患者の事例であった。資料を用いた事例紹介の後、講師が、退院 2 日前に血圧低下など病状の進行を認める中で、病棟看護師が提案した退院調整看護師・医師を交えたカンファレンスが有効に実施できなかったプロセスを演じた。

表1 グループワーク①の発言内容

**グループ1**

- ・介護老人保健施設では、看取りのケアについてヘルパーとともに悩むことが多い。スタッフ間で「これでよいか」「どのようなケアが必要か」を確認しながら関わっていききたい。
- ・訪問看護では、自宅での看取り目的で利用する人も多い。情報共有は多職種で行っている。介護する家族の疲れがあり、患者と家族のそれぞれの思いや価値観のどちらを優先すべきか悩む。連携・情報共有しながら検討していくことが必要であると考えている。
- ・カンファレンスを繰り返していても、最終的な解決に結びつかないケースもあり葛藤もある。

**グループ2**

- ・ELNECの研修後1年後の自分の目標、頑張ろうと思っていたことなどを共有した。
- ・他職種や新人、EOLに対する関心の低いスタッフをどう巻き込んでいくか、関心をどう持ってもらうかが課題である。
- ・チームでEOL Careを行っていくことの必要性和難しさを感じている。
- ・ELNECの研修を受けたことで、スタッフや新人から相談をしてもらえるようになってきたと感じている。

**グループ3**

- ・地域包括ケア病棟では、退院に向けて本人と家族が納得できるよう調整しているが、短期間で再入院になることも多い。
- ・本人・家族の金銭的な問題で十分な医療の提供ができないことがある。家族も「見殺しにしてしまっている」と悩むこともある。
- ・傾聴し、患者の思いを理解・把握する必要がある。業務が忙しく、患者が遠慮をしないような姿勢と関わりが必要と考える。PHSを病室へ持っていかないなどの工夫を行っている病棟もあった。
- ・ELNECでの学びをスタッフへ伝えて、全体の意識を高めていけるとよい
- ・在宅で生活するなかで、患者の価値観を大切にしていきたいと考えている。

(2)後半のプログラム

グループワーク②として「高齢者のEnd-of-Life Careとチームケアにおける看護の役割に関する実践上の課題と課題解決に向けた取り組みについて」をテーマに、前半のロールプレイの内容について、看護師として何が問題だったか、チームケアを実施する上で看護師としてどのような役割を果たすべきかについて検討した。グループワークでは、発言内容を確認しながら検討が進められるよう、グループ毎にホワイトボードを設置して、ファシリテーターである講師が司会と記録をしながら進めた。

約40分間のグループワークの後、2つのグループが代表して検討内容を報告し、参加者全員で共有した。カンファレンスが有効にできなかったことについては、カンファレンスの目的が明確でなく退院調整看護師や医師に目的が伝わっていないことを挙げ、目的を明確にしたカンファレンスの開催や利用者にとって有効なカンファレンスであるためにも、本人や家族が参加できるカンファレンスの開催などの提案があった。2つのグループの発言について、表2で示した。

表2 グループワーク②(事例検討)の発言内容

**グループ1**

- ・毎日患者と関わっているのは病棟看護師であるが、退院調整看護師からのアプローチがなければカンファレンスを行っていなかったのかと疑問に感じた。
- ・スタッフの思いや都合での行動や発言が多かった。
- ・患者に対するスタッフの思いが乏しいと感じた。
- ・何のための話し合いで、話し合いのテーマが決まっていなかったのも問題である。
- ・医療者と家族の理解度は異なると思う。どう受け止め、感じているかを知る必要がある。

**グループ2**

- ・いつ、どこで、何についてのカンファレンスをするのかをスタッフ、医師に共有できていなかったのが問題であった。
- ・「たぶん」「～だろう」等、曖昧ではいけないと思う。あらかじめ、カンファレンスの日時や内容、参加者をしっかりと伝えておく必要がある。
- ・カンファレンスにバラバラと集まるのではなく、開始時間をしっかりスタッフに伝える必要があった。
- ・家族の認識と理解、本人の思いを共有する必要がある。
- ・家族、できれば本人もカンファレンスに参加できるとよい。

## V. 研修会の評価

### 1. 研修会実施後の参加者アンケート調査

#### 1) アンケート調査方法

研修会実施後に参加者から研修会の評価を得るために無記名自記式でアンケート調査を実施した。質問項目は「問1 本プログラムに参加してEOL Care 充実の視点で目的を達成できたか」、「問2 プログラムの内容は今後の自身の看護活動に活かせるか」、「問3 グループワーク及び講義について」、「問4—その他 自由意見」とし、問1~3は5段階評価と自由記述の欄を設けた。アンケート調査用紙はA4版両面印刷で1枚とした。研修会プログラム終了後にアンケート記入の時間を設け、退室時に所定の箱に投函してもらった。

#### 2) アンケートの結果

アンケートは25名の参加者全員から回収できた。「問1 本プログラムに参加してEOL Care 充実の視点で目的を達成できたか」については、大変そう思うが12名、ややそう思うが13名であった。自由記述の内容は18記述で、【EOL Careの実施について同じ悩みや思いを共有することができた】【グループワークによって多様な視点で考えることができた】【EINEC-J研修会の学びの再確認ができた】【学んだことを明日からのケアに活かせる】【これまでのケアを振り返ることができた】【看護について語り合える有意義な時間となった】【良い支援のためには看護師が多職種連携のキーパーソンになることが大切である】【研修の学びと実践を連環させることが重要である】の8つに分類できた。

結果を表3に示した。

表3 EOL Care 充実の視点で目的を達成できたか

分類	記述の要約
EOL Careの実施について同じ悩みや思いを共有することができた	充実に向けての取り組みは施設内で一人では難しいが、グループワークで取り組む仲間がいることを嬉しく感じた。
	自分が迷ったり不安に思うことを同じように経験している人の話を聴き、日々の中でさらに活かせると感じた。
	同じ思いでいる人がいることが実感できてよかった。
グループワークによって多様な視点で考えることができた	グループワークによって色々な考えがあることを知ることができた。
	他の意見を多く聞くことができ病院の視点から違った角度でEnd-of-lifeについて考えることができた。
	様々な施設に所属している人との意見交換によって、自部署で自分の立場でできることを考えることができた。
EINEC-J 研修会の学びの再確認ができた	高齢者のEOL Careを再確認できた。
	忘れかけていたものを思い出せたように思う。
	EINEC-Jの講義内容を改めて振り返ることができた。
	再確認できたし、参加することで再びファイルを読んだ。振り返りができた。
学んだことを明日からのケアに活かせる	初心に帰って、患者や家族とゆっくり人間関係を築き細かな変化に気づくことを大切にしたい。
	現場での実践は間違えではないと思い本日学んだことが活かせると思った。
これまでのケアを振り返ることができた	モジュールの振り返り、エンドオブライフケアの再学習、定着、チームメンバーへの伝達するための方法を明日から活かしたい。
	患者や家族と終末期になる前から関りができていたか振り返った。
看護について語り合える有意義な時間となった	看護について語り合える場となり、有意義な時間だった。
良い支援のためには看護師が多職種連携のキーパーソンになることが大切である	看護師がキーパーソンとなり多職種とつながることが、患者や家族にいい形で支援することになるのではないかと感じた。
研修の学びと実践を連環させることが重要である	今日の研修で共有したことが日々の実践に生かせる、次の研修で更に拡大するといった繰り返して実践が円滑になると考える。

次に、「問 2 プログラムの内容は今後の自身の看護活動に活かせるか」については、大変そう思うが 17 名、ややそう思うが 8 名、自由記述は 19 記述で、【研修で得た学びや意見を実践に活かしたい】【チームメンバーとの取り組みを進めて行きたい】【利用者の思いを大切に支援していきたい】【ケアを振り返る時間を持ちたい】【つなぐことを大切に支援したい】の 5 つに分類できた。また、自らの活動を振り返って、間違っていなかったと確認できたことや、小さな積み重ねが大切だといった感想の記入もあった。結果を表 4 に示した。

表 4 プログラムの内容は今後の自身の看護活動に活かせるか

分類	記述の要約
研修で得た学びや意見を実践に活かしたい	気持ち新たに少しずつ取り組んでいきたい。
	様々な職場で働く方と情報共有・意見交換ができ今後の実践に生かしていきたい。
	再確認ができ現場で活かすことができる。
	是非、看護活動に活かしたい。
	多様な視点からの意見を聞くことができ、活かしていきたい。
チームメンバーとの取り組みを進めて行きたい	研修で得た他の視点も参考としていきたい。
	スタッフとともに施設全体で取り組めるよう努めたい。
	多忙な業務の中でも自分が率先して緩和ケアを行い、チームを巻き込んでケアを行っていきたい。
	スタッフの価値観が異なってもお互いを尊重しながら話す努力をし、患者・家族の思いにつなげられるよう頑張りたい。
	チームで共有、同じ方向を向くことの必要性を学べた。
利用者の思いを大切に支援していきたい	グループワークに参加して患者・家族のために自分に何が必要でスタッフにどう働きかけるかを考え、実施していきたい。
	患者・家族の気持ちをもっと考えて退院調整していかなければという反省をした。
	家族に信頼してもらえることが大切と再認識できた。
	人生の最終段階をどう過ごしたいか、本人の思いを大切に次の段階へつなげていきたいと学んだ。
	患者や家族との関りを振り返り、明日から利用者、家族に寄り添い頑張っていきたい。
ケアを振り返る時間を持ちたい	施設入所までの利用者の背景を大切に受け止め、丁寧にアプローチしていきたいと改めて感じた。
	初回の研修後に立てた自分の目標や今日の学びを活動に活かせるよう振り返りをする時間も作りたい。
ケアを振り返る時間を持ちたい	高齢者社会に向けて高齢者の EOL ケアの振り返りを行いたい。
	日頃の看護や周囲との関わりを振り返るきっかけとなり、“つなぐ”ことに力を入れたいと改めて思った。

3 番目の講義及びグループワークについての質問には 24 名から回答があった。

講義に興味・関心をもてたかの問いに、大変そう思うが 14 名、ややそう思うが 10 名であった。また講義の内容が臨床で遭遇する問題の問題解決につながると思うかの問いに、大変そう思うが 8 名、ややそう思うが 15 名、普通が 1 名であった。講義に対する自由記述は 4 記述であったが、資料が分かりやすかったという意見の一方で、限られた時間であったため少し早口だと感じたなどの意見があった。

また、グループワークについて、グループワークは臨床で遭遇する問題の解決につながるかの問いに、大変そう思うが 12 名、ややそう思う 12 名であった。自由記述は 11 名から意見が得られたが、他施設の意見や様々な意見が聞けて良かったという内容が多く、良いアドバイスが得られたという内容もあった。

その他の感想として、事例をもっと検討したい、実際に質の向上が図れた事例などの紹介や共有の機会を設ける、アドバンスケアプランニングについての取り組みの紹介などの提案があった。

### 3) 講師と教員による振り返り

研修会終了後に 30 分程度、講師と教員で参加者のアンケートの結果を共有し、研修会の評価を実施した。

まず、グループワークにおける参加者の発言から、所属施設において EOL Care の方向性が共有できないことや協働する仲間が得難い、高齢者ケア施設では管理者が看取りをしない方針を明確にしていることに疑問を持つ等、実践現場での課題が確認できたことを共有した。

次に、今回の研修会について、短い時間で EOL Care のポイントが学べる構成であったが、グループワークや共有の時間がやや短かったとの感想が聞かれた。また、今回は、1 グループに医療機関、訪問看護ステーション、高齢者ケア施設からの参加者が居るようにメンバーを構成したことで、施設の特徴を踏まえながら、各施設の状況を共有することができ良かったとの評価であった。一方、参加者は研修会を介して実践現場で日々感じている課題解決の方向性を見出すことを期待していることや、各施設のリーダークラスの看護職が研修会に参加していること等を考慮し、次回はグループワークを通じて参加者自身が気づきを深め、具体的に実践の課題に取り組めるような研修会となるよう、さらに検討していく必要があるとの意見が挙げられた。

全体の運営については、研修会の目的やプログラムの概要は昨年度の研究での取り組みを踏襲する予定であったため、今年度は講師と教員による研修会の検討会は 1 回だけで、その後は学内教員と講師とが分かれて準備を進めた。しかし、メール等のやり取りでは十分な検討ができないため、次年度は Web の使用なども視野に入れながら、事前準備の方法も工夫していく必要性を確認した。

## VI. 成果

### 1. 実践現場や看護職者に与えた影響

本研修会は、ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象に、ELNEC-J のフォローアップとしての位置づけで実施した。研修終了後のアンケート調査から、ELNEC-J の学びを再確認できといった意見とともに、EOL Care の実践について同じ思いや悩みを共有できたことやグループワークを介して多様な視点で考えることができたといった意見が得られ、本研修会の学びを明日からのケアに活かせるといった評価も得られている。

グループワークでの参加者の発言にもあるように、ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムを受講し、より良い EOL Care を提供することについて意識が高まる一方で、それぞれが看護実践現場の現実に直面し、悩むことも多い。本研修会の参加者は、知識を再確認するだけでなく、グループワークを通じて EOL Care に取り組む仲間を得、課題を共有することで、より良いケアを提供したいというモチベーションを維持することができたと考える。さらに、EOL Care についてチームメンバーと取り組んで行きたいとの意見も得られており、研修会の学びが参加者に留まらず、参加者が核となり、所属施設や看護チームのメンバーと協働して EOL Care の実践を向上させる機会となったと考える。

また、本研修会の講師は県内で活動するがん看護専門看護師が担当しているが、参加者同士の意見交換に加え、EOL Care のスペシャリストからの助言を得ることで、課題に対する視点の転換や課題解決のプロセスを論理的に考える機会を得られたという点で有効であったと考える。

### 2. 本学の研究や教育活動に与えた影響等

研修会の参加者は医療機関、訪問看護ステーション、高齢者ケア施設に所属しており、参加者を通じて各看護実践の現場での EOL Care の現状を確認することができ、実践の改善に向けて研究として取り組むべき課題を確認することができた。また、県内で活動しているがん看護専門看護師と協働して研修会を開催することで、岐阜県の EOL Care の課題の共有や EOL Care の実践者の育成について共に考えることができ、大学院教育にも反映することができている。また、がん看護専門看護師との協働を通して、がん看護専門看護師コースの教育のあり方を考える機会にもなっており、教育の充実につながっている。

## VII. 今後の課題及び発展の方向性

本研修会は平成 28 年度、29 年度に取り組んだ共同研究を基盤に、本年度から看護実践研究指導事業として取り組み開始した。本年度の評価から、研修会の目的や研修対象者、プログラムの大きな枠組みについては継続する方向で良いと考えている。一方、受講者のアンケート調査結果や講師との振り返りから、参加者の多くが職場でリーダー的役割を担い、問題意識も高く、所属施設の課題についても理解していることを考慮し、参加者の受講ニーズに応じて行けるよう、研修会の内容を再吟味していく必要があると考える。